

倉吉・満正寺の仏像「延命地藏」

平安中期の制作

県内最古級 保存策協議へ

倉吉市鍛冶町二丁目の満正寺（宮田英俊住職）に伝わる仏像「延命地藏」が、平安時代中期（十一世紀）の制作で、県内最古級に当ることが分かった。倉吉市教委は二十五日、同市文化財保護審議会（多田勉会長）に報告した。関係者は、「仏像の歴史を考える上で貴重な資料」とし、台座修復後に保存策を協議する。



平安時代中期の作と分かった「延命地藏」を観察する倉吉市文化財保護審議員

昨年十月の西部地震で仏像の台座が壊れたことをきっかけに、同市教委が東京国立博物館の金子啓明事業課長（元法隆寺宝物館室長）に調査を依頼した。

仏像は、足と手が欠けており、残存長九十四センチ。胸部分の幅は三十三センチ。木の種類は不明。頭頂部に木芯（しん）といわれる年輪があり、木の中心部を用いた丁寧な造りをするかがわかる。

平安時代中期の特徴で

ある目を彫り出す一大彫眼（ちようがん）造り。同時代以降の仏像は、目を彫らずガラス玉をほめていた。また、衣を着た状態や襟の形、胸の張り具合などからも制作年代を推定できた。

寺伝によると仏像は、久米郡北野村（現倉吉市西倉吉町付近）にあった安楽寺の本尊で大山寺から伝わったという。一六九九（元禄十二）年に満正寺を創建した倉吉荒尾家三代、荒尾秀就（ひでなり）が、当時は廃寺となっていた安楽寺から譲り受けられたという。

